



Title	認知症高齢者における徘徊の客観的評価と主観的評価の比較と応用
Author(s)	矢山, 壮
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59841
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	矢山 壮
博士の専攻分野の名称	博士（看護学）
学位記番号	第 26130 号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	認知症高齢者における徘徊の客観的評価と主観的評価の比較と応用
論文審査委員	(主査) 教授 牧本 清子 (副査) 教授 早川 和生 教授 三上 洋

論文内容の要旨

認知症患者のケアで、最も大きな問題は認知症患者の症状への対処の難しさであるといわれている。特に、認知症患者に特徴的な暴力、徘徊、異食、などのいわゆる行動心理学的徴候(BPSD) に対しては、患者本人だけでなく、その家族やケア提供者にとって大きな負担となることが問題となっている。徘徊はBPSDの中でも最も介護負担の大きいものの1つである。また転倒、転落のリスクが高く、効果的なケアは確立されていない。徘徊の研究で最も大きな問題の1つが、徘徊の定義が統一されていないことである。それぞれの研究が独自の定義で行われているため、徘徊の測定方法も多種多様である。先行研究では介護者が評価している研究がほとんどであるが、介護者の評価の妥当性について検討されている研究はほとんどなかった。本研究の目的は看護師が評価したアルゲイス徘徊尺度(AWS)とICタグモニタリングシステムによる歩行記録データを比較することとした。対象者は大阪府下のA病院の認知症治療病棟に入院する独歩可能な認知症患者30名であった。看護師がAWSを用いて患者の徘徊を評価した。本研究で用いたICタグモニタリングシステムはICタグを装着した患者が病棟の天井裏に設置したアンテナの下を通ると、その時間と場所の情報が自動的にコンピューターに蓄積される。そのため、認知症患者の時間別歩行距離や歩行場所が連続して長期間モニタリングできる客観性の高いシステムである。ICタグモニタリングシステムで、時間別歩行距離と病棟のアンテナの位置ごとの感知回数を測定した。比較した項目は、時間的な歩行については、AWSでは「起床後から朝食前までの徘徊」「朝食後から昼食前までの徘徊」「昼食後から夕食前までの徘徊」「夕食後から就寝前までの徘徊」で、それぞれの項目に対応したICタグモニタリングシステムのデータは「5:00-8:00」「8:30-11:30」「12:00-17:30」「18:00-21:00」の歩行距離とした。空間的移動については、AWSでは「行ったり来たりする行動」「同じ道筋を何度も歩き回る」で、ICタグモニタリングシステムでは「pacingの回数」「lappingの回数」とした。

本研究の結果は時間的な歩行では、日中の行動である「朝食後から昼食前まで」「昼食後から夕食前まで」の看護師による評価とICタグモニタリングシステムによる評価は一致したが、早朝や就寝前の行動である「起床後から朝食前までの徘徊」「夕食後から就寝前までの徘徊」は一致しなかった。日中と夜間の評価の相違は、夜間は日中よりも患者と看護師が遭遇する確率が低いことが考えられ、看護師の日中以外での患

者の歩行評価が難しいことを示している。また、空間的移動である、「行ったり来たりする行動」「同じ道筋を何度も歩き回る」の看護師による評価とICタグモニタリングシステムによる評価も一致しなかった。このような患者の施設内での動きの把握は難しく、1日に複数人担当する看護師では1人の患者の行動を詳細に把握することは困難であると考えられる。

以上のことから、尺度による徘徊の評価の妥当性は高くないため、看護師の評価のみで徘徊行動を評価するのではなく、客観性の高い評価指標も含めて評価する必要性が示唆された。今後の徘徊介入研究などにおいて、ICタグモニタリングシステムによる正確な徘徊の評価方法で評価が可能となり、徘徊のケアのエビデンス構築の一助となると考えられる。

論文審査の結果の要旨

認知症患者の徘徊は認知症の症状の中でも最も介護負担の大きいものの1つであり、転倒・転落のリスクが高く、ケアが難しいとされている。先行研究では徘徊の定義が統一されていないため、徘徊の評価方法も多種多様である。最も多く使用されている徘徊の評価方法は尺度である。しかし、それらの尺度の妥当性の検証に対して、客観性の高い評価方法を使用した研究はほとんどない。著者らは客観性の高い評価方法としてICタグモニタリングシステムを使用し、徘徊を長期間持続的に評価することが出来るシステムを開発した。本研究では客観性の高いICタグモニタリングシステムにより看護師が評価したアルゲイス徘徊尺度の妥当性を検証した。

本研究は大阪の総合病院の認知症専門治療病棟(60床、閉鎖病棟)で行われた。アルゲイス徘徊尺度は患者の担当看護師によって評価された。ICタグモニタリングシステムは病棟の天井裏にアンテナを設置し、患者の衣服にICタグを装着することで、時間的移動(時間別歩行距離)と空間的移動(病棟のアンテナごとの感知回数)を測定した。アルゲイス徘徊尺度の妥当性の検証をした項目は、時間的移動については、「起床後から朝食前までの徘徊」「朝食後から昼食前までの徘徊」「昼食後から夕食前までの徘徊」「夕食後から就寝前までの徘徊」で、それぞれの項目に対応したICタグモニタリングシステムでの時間を「5:00-8:00」「8:30-11:30」「12:00-17:30」「18:00-21:00」の歩行距離とした。空間的移動については、アルゲイス徘徊尺度では「行ったり来たりする行動」「同じ道筋を何度も歩き回る」の項目については、ICタグモニタリングシステムでの空間的移動は「pacing(2つのアンテナ間を行ったり来たりする行動)の回数」「lapping(病棟の4つの角を時計回りか反時計回りに回る行動)の回数」とした。本研究は大阪大学医学部保健学倫理委員会、当該病院倫理委員会の承認を得ておこなった。

対象者は30名で、時間的な歩行では、日中の行動である「朝食後から昼食前まで」「昼食後から夕食前まで」の看護師による評価はICタグモニタリングシステムによる評価と一致したが、早朝や就寝前の行動である「起床後から朝食前までの徘徊」「夕食後から就寝前までの徘徊」は一致しなかった。また、空間的移動である、「行ったり来たりする行動」「同じ道筋を何度も歩き回る」の看護師による評価はICタグモニタリングシステムによる評価と一致しなかった。

日中の行動は尺度での妥当性は高かったが、早朝や就寝前の評価は妥当性が低かった。また、pacingやlappingのような空間的移動についての評価も尺度では妥当性が低かった。看護師の評価のみで徘徊行動を正確に測定するのは難しいと考えられるため、客観性の高い評価指標も含めて評価する必要がある。

以上のことにより、本論文は博士(看護学)の学位授与に値するものと考えられる。